

早稲田大学におけるトップアスリート入学者の現状 A top athlete new student's present condition in Waseda University

1K09A141 竹下和宏

指導教員 主査 間野義之 先生

副査 木村和彦 先生

【目的】

私の通う早稲田大学、スポーツ科学部には、トップアスリート入試という入試制度がある。私はこのような入試制度には、大きく賛成である。なぜなら、勉学のみならず、何かに突出した才能を評価し、受け入れるということは、これからの日本のスポーツにおいて非常に大きな役割を果たすと考えからである。というのも現在の日本では、スポーツの一芸のみで生活できている人は、ほんの一握りしかいない。その中で、才能溢れるトップアスリートが、早稲田大学のスポーツ科学部でスポーツを競技という視点からでなく、医科学や経済等、様々な視点を持った上で社会に出ていけば、日本のアスリートにも少し明るい未来が待っていると思う。

しかし、このトップアスリート入試で入学した人が、競技、勉学ともに充実した生活を送れているかというとは実はそうではないようである。私の同期のトップアスリートで入学した友人から、遠征や合宿等で、単位を取得することに苦労しているという話を聞いた。この話を聞いた時、大学側は、トップアスリート入試を実施する際に、そのアスリートが入学してから海外に遠征、合宿等で通常の授業への出席は難しくなることは分かっていたはずであるのに、なぜそのような状況が生まれるのだろうと疑問に思った。そこで本研究は、大変な努力をして素晴らしい功績を残し、それが認められて晴れて早稲田大学に入学したアスリートの現状を調査し、どうすればアスリートが、競技、学業ともにさらに充実した環境を作れるのかという改善策を考えてみることを目的とする。

【方法】

早稲田大学にトップアスリート入試で入学したアスリートが学業面で苦労している可能性があるので、その現状把握を行う。

早稲田大学に在学しているトップアスリート入試での入学者のうちの7名にインタビュー調査を行った。インタビューでは主に以下の4点について質問し、気になるポイント等はさらに掘り下げて質問する半構造的インタビューで調査を進めた。

- 1、それぞれの競技をしている中で早稲田大学への進学を決意した理由
- 2、それぞれの競技をしている中で、進路を決定する際に他の選択肢があったかどうか
- 3、学業の面で苦労したこと、または不安に思っていること
- 4、3に対して大学側に改善してほしいこと
- 5、その他

【結果】

質問1については、早稲田大学に対する憧れを持っていた、親の勧めなどといった意見が多かった。

質問2では、競技によって回答が分かれた。水泳等の場合は、大学を出てから社会人でプレーするという流れがあり、進学以外の選択肢はなかった。ラグビー、野球などは高卒で海外やプロでプレーするといった選手もいるので、進学と迷ったという回答が得られた。

質問3では、海外遠征や合宿等で出席回数が足りないということ考慮されず必修の授業の単位を落としたという意見が多かった。

質問4については、出席を考慮してほしい、オンデマンドの授業を増やしてほしいといった意見を得られた。

【考察】

今回、トップアスリート入試で入学した友人のこぼした一言からこの論文を書くに至ったが、実際にインタビュー調査をしていく中で、アスリートが本当に苦労していることがわかった。トップアスリート入学という入試で入学した選手が、日本または世界レベルの大会で活躍することは、トップアスリート入学という枠を設けている大学側にとっても、非常に喜ばしいことであるはずであるのに、その大会や代表合宿に行ったが為に授業に出席できず、単位がとれずに苦労しているという現状は極めて残念なことである。今回のインタビュー調査で、実際にアスリートの口から出た要望が実際の大学のシステムの中に組み込まれ、アスリート大学ともに成長していけたら良いと思う。

以下アスリートへのインタビュー調査から抽出した授業に関する改善点をまとめたものである

- ・海外遠征、試合等の理由であれば、出席の代わりとなるレポート等の救済措置を与える
- ・オンデマンドの授業を増やす、科目登録の際にオンデマンドを選択したらトップアスリート入学の生徒は確実に履修できるようにする
- ・遠征、試合の参加証明書にどのような効果があるか、具体的なものがないので、そこを具体化する
- ・必修の英語の授業の出席のみで単位の認定を決めるというシステムそのものを変える
- ・必修の英語の授業をオンデマンド化する